

昭和五十六年度東北史学会 弘前大学国史研究会二十五周年記念

合同大会記事

昭和五十六年度東北史学会・弘前大学国史研究会二十五周年記念合同大会は、昭和五十六年十月十七・十八日の両日にわたり、弘前大学・弘前文化センターに於て、次のようなプログラムにより開催された。

第一日（十月十七日 土曜日）

○弘前大学国史研究会総会（午前十一時）於・弘前文化センター会議室

○公開講演会（午後一時三十分～午後四時三十分）於・弘前文化センターホール

「東北地方の館について」……………北上市立博物館 本堂寿一氏
「華嚴美術の日本的展開―シルクロード・東大寺大仏・明恵上人結ぶもの―」

（スライド使用）……………青山学院大学 石田尚豊氏

○東北史学会総会（午後四時三十分～五時）於・弘前文化センターホール

※貸切バス 午後五時三十分 弘前文化センター前発車

○懇親会（午後六時三十分）於国民宿舎「おおわに荘」

第二日（十月十八日 日曜日）

研究発表会（午前九時三十分～）於・弘前大学教養部

○考古学部会（於・23番教室）

○日本史 古代・中世史部会（於・19番教室）

○日本史 近世・近代史部会（於・22番教室）

○東洋史部会（於・20番教室）

○西洋史部会（於・21番教室）

※控室・18番教室

〔公開講演〕

東北地方の館について

本堂寿一

氏は学生時代より今日に至る迄、東北地方北部の館跡はもとより、北海道のチャシの調査研究を続けてこられ、北奥館跡研究の第一人者と目される方である。

今回の講演では、特に津軽地方の中世前半における館の様相を、永年の研究に基づいて浮彫りにしようとするものである。文献史料に恵まれない本県中世史の研究に新しい視野を拓くものとして、広く郷土の歴史に関心を持つ方々の期待にこたえるものであらう。

華嚴美術の日本的展開

石田尚豊

東京大学文学部卒業。東京国立博物館資料課長を経て現在青山学院大学文学部教授。文学博士。大学卒業以来、一貫して仏教美術史の研究に

専念、昭和五十三年には「曼荼羅の研究」により日本学士院賞を受賞された。

華嚴經に関する遺品は、中国・朝鮮・日本を通じて極めて少ないが、シルクロードを経て伝えられた華嚴美術が、わが国においていかに花開いたかについて、スライドを使用しながら、ご講演いただくことにする。

〔研究発表要旨〕

へ考古学部会へ

亀ヶ岡遺跡の調査について

青森県立郷土館 鈴木 克彦

浪岡城跡発掘調査よりみた 中世考古学の諸問題

浪岡町教育委員会 工藤 清泰

文献の少ない中世史を考古学的視野から再構築しようという気運が高まりつつある。発掘調査によって現出された事実関係は、日常生活の意味において、従来文献等では詳述できなかった住居形態・生活用品等をリアルな形で表現している。

特に、東北地方における発掘例の増加は、他の地域ではみられない特殊性も提示してきた。第一に、掘立柱住居跡と竪穴遺構との複合関係であり、地域的・階層的・時間的な諸問題を有している。第二に、支配層

における舶載陶磁器と国産・在地陶器の搬入比率の問題である。舶載陶磁器が全出土陶磁器の五〇％以上の比率で搬入されている城館跡がかなりみられることは、交易形態の面から、関東・中部地方とは異質な様相がみられる。第三に、第二の問題とも関係するが在地雑器の生産構造がよくわからないことである。中世的「かわらけ」が東北北半・道南を中心に明確に把握できない状況は、単に地域差だけでなく、日常生活用具の機能的差異の表われと考えられる。

今回、上記の主要三問題をふまえながら、浪岡城跡という一在地領主の居拠した城館跡を中心に、中世考古学の諸問題にアプローチしてゆきたいと考えている。

△日本史 古代・中世史部会△

日本神話と近代思想

― 鷗外「かのやうに」と芥川「おひたる素戔鳴尊」―

山形大学 川副 武胤

I 森鷗外は『かのやうに』の中で、神話と歴史とははっきり区別すべきである、しかし明治四十年代の日本は国家にも社会にも、神話と古代史との混同がみられ、それに反する意見は圧殺されるだろう、従って、この小説の主人公は自らたてたその見通しにも拘らずその作業を果たすことができないとする。しかし鷗外は主人公の言葉を通して、その作業によって日本の国家と社会とを秩序づけている国家祭祀やそれを根底におく秩序―国体―は破壊されないであろうということを、

Hans Eihinger の „Die Philosophie des Als-ob“ をかりて説いている。

II 芥川龍之介の小説『老いたる素戔鳴尊』は古事記のスサノヲノミコトの神話を近代合理主義的な解釈によって、つくりかえ、老人と若者を対比して、女婿をもつ老人の心理を描いている。しかし古事記神話のもつ立体性・神秘性は捨象されてしまっている。

鵼外には神話と歴史の区別がはっきり見えていたと観察されるのに対し、芥川には日本神話のフィクション・コンポジションは見えていなかった。鵼外には近代思想を超えた思想があるが、芥川には、近代合理主義¹の狭い視野、独善性しかない。このような、近代主義²は今日まで続いている。

古代総領制についての再検討

秋田県立男鹿高校 渡部 育子

古代における総領制に関しては、性格、職掌、設置の時期、設置の目的、設置範囲等多くの点について説明が試みられてきた。しかし、それらは必ずしも一致した見解を示しているわけではない。まず、性格・職掌をめぐっては、総領が行政官的な性格のものであるのか軍事的色彩の濃いものであるのかという点で説が分れている。また、設置の時期や目的についても、総領設置の特別の目的はなく、国が分割してゆく過程の中で、旧来の国司を格上げして総領と称したとする見解と、軍事上の必要性のために特定の地域に設置されたとする見解があり、後者の場合、設置の時期を天武朝とするものが多い。

このように、総領に関しては多くの研究史の積み重ねがありながら、その全体像については未だ明確になっていないのである。しかし、総領

は七世紀後半の地方制度を明らかにしていく上で重要な意味をもつものであるから、職掌・性格などについて再検討することは是非必要であると考えられる。また、総領が何らかの形で国司の上に位置するものであるとすれば、当然、当時、すなわち成立期の国司制の中でこれがどのような役割を果たしたのかということが問題になってくるが、これまでは、このような観点からの考察はあまり為されなかった。

このようなことから、総領制は再検討されなければならないと考えるが、ここでは、国司とのかかわりを中心に、七世紀後半の地方支配政策の中で、総領制がどのような意味をもっていたのかということについて考察をすすめたい。

はじめに

一、総領と大宰

二、職掌・性格について

三、設置時期と存続期間

四、設置の目的

五、総領と国司と使

六、国司制成立過程における総領制の意義

おわりに

松島寺と立石寺

東北大学 入間田 宣夫

金沢文庫古文書のなかに鎌倉末のものとと思われる（社寺交名）がある。諸国の社寺を書きあげたなかに、「陸奥国 松嶋白河」「出羽国 立石寺」の文字が見える。この二寺がならび記されているのはなぜか。それは両者がともに関東（将軍家）御祈祷所であったからにほかならない。松島瑞厳寺（旧圓福寺）・山寺立石寺に現存する鎌倉末・室町期の文書を比較対照することによって、両者の関東御祈祷所としての特徴はこの

うえなく鮮やかに浮びあがることとなろう。この二寺はともに慈覚大師創草の伝説をもち、さらにその背景には死者を祀る霊場としての共通の民俗的土壌があった。関東御祈禱所・慈覚大師伝説（天台宗）・霊場というように重層的に共存する宗教的位相の関連を解き明かすことは興味ある課題であろう。松島寺の見仏上人にあてた北条政子の消息も興味深い。霊場松島の名声は見仏上人のそれと結びついて鎌倉にまで聞えていたのであった。

中世の醍醐寺について

山形大学 伊藤清郎

△日本史 近世・近代史部会▽

羽州庄内幕領の定免制

―大山・丸岡両領を中心に―

市立大月短期大学 本間勝喜

近世庄内には一七世紀後半に三つの幕領（丸岡、大山、余目）が成立したが、それら三領共に一八世紀初めに定免制が施行された。

余目領では正徳三年に定免制となったようであり、その場合特に年季を定めず、そのまま天保一三年まで一三〇年間も定免制が継続され、いわば事実上の永（年季）定免制であった。幕領の中でも例外的であった

と思われるが、既に他の機会に報告した（注）ことがあるのでここではふれない。

大山・丸岡両領では享保八年より全村一斉に定免制が施行されたようである。幕府は享保改革において定免制の採用を中心に増徴策をとるが大山・丸岡両領の場合もその一環であった。従って、他の幕領と同様に大山・丸岡両領の定免制は年季が三〇―四〇年の年季定免制で、定免切替を利用して増米が行われた。特に、享保一〇年（村高一分増米）及び同一三年（同三分増米）の両度に合せて村高の四割増米が行われたが、村々の具体的生産状況を無視した、強権的な一率増米であり、そのため生産条件の恵まれない、それ故従来低租率であった村ほど急激な租率の引き上げに結果した。それにより、享保末頃より、丸岡領に属する山添いの村や最上川沿いの村を中心に、潰百姓の発生や村総作地の増大などの農村疲弊がみられるようになった。そして、定免切替の際の増米に應じきれず、宝暦頃より検見取となる村が次第に現われた。

それでも、天保一三年で定免制が打切られ、それ以後全面的に検見取制に移行するまで、庄内幕領では定免村が大勢を占めた（余目領では一四カ村全村、大山・丸岡両領では五七カ村中四二カ村が定免村であった）。このような庄内幕領における定免制の一般化の経済的基礎は一七世紀以降の農業生産力の発展と小農民経営の展開にあったと考えられる。以上のように、大山・丸岡両領の事例を中心に庄内幕領の定免制とそれに関連する諸問題について述べたい。

（注）昨年度山形史学研究会大会報告「余目御料の年貢制度―『永定

免皆金納」制について。

会津藩の謂ゆる「土地分給制」について

福島県立医科大学 丸 井 佳寿子

会津藩においては、天明七年、家老田中玄宰より改革の大綱がだされ、藩政改革が翌八年から実施に移された。他の諸藩と同様、鄉村支配の再編強化、荒廃した農村の恢復をはかうとするものであったが、この改革の一連の動きの中で実施されたのが、謂ゆる「土地分給策」とよびならされてきた土地政策である。これについては、古くは「世事見聞録」がその実施されたことを伝え、そしてそれを肯定する本庄栄治郎氏、実施に否定的な土屋喬雄説などがあった。しかしいづれにしてもその実態は明らかでなかったが、それに始めて迫られたのが庄司吉之助氏であった。氏はあらたに見出された史料「会津郡政一貫」の分析により、寛政年間、兼併地主の阻止、自営農の再創出を目的として平均所有化を行ったのが土地分給策であったと述べられた。その後、藤田五郎・羽鳥卓也氏は、庄司氏の分析を前提として、土地分給制は「再版農奴制」的色彩の払拭と、寄生地主的土地兼併を防止することを目指した改革であったとされた。さらに長倉保氏は、無跡・手余高割地が土地分給制の主対象であったとし、分給策は、寄生地主への推転を展望させるものであったと評価された。

しかし、「会津郡政一貫」を再検討してみると、会津藩で寛政期に行われた「田地並」政策とは、かならずしも所有の平均化、あるいは無跡・手余地を主対象としたとばかりはいえない政策ではないかという疑問

が生じたので、他の若干の史料と併せ、この疑問を述べてみたい。

津軽藩の蝦夷地出兵と藩政の動向

御茶の水女子大学院生 浅 倉 有 子

本州の最北端に位置を占める津軽藩は、幕藩制国家において、「蝦夷北狄之押へ」として位置づけられていた。それ故、ロシアの南下という「外圧」に対抗するため、幕命により、寛政ノ文政年間に、南部藩と共に蝦夷地警衛に携わることになった。その間の派兵は、およそ四段階に分けて理解することができる。即ち、

1期—寛政九年ノ同十一年

松前藩の補助を目的とした派兵

2期—寛政十二年ノ文化三年

東蝦夷地の収公を契機とする、収公体制の確立を目的とした派兵

3期—文化四年ノ同十一年

蝦夷地永久上知と、ロシア船による千島・樺太での暴行事件という相対的危機の高まりの中での、藩力の限界に至る派兵

及び、文化十二年から、文政四年の松前・蝦夷地一円の返還までの小規模な派兵、の四段階である。

この蝦夷地警衛は、当然のことながら、藩政に様々な影響を与えた。例えば、寛政年間の藩士土着制は、動員人数の確保（特に武家奉公人

の確保)を目的の一つとして実施されたものである。また、一般領民が大量に「武士」として派遣されたことから、藩内の身分制、及び職制にも動揺をもたらした。また、これらの派兵を通して、家中軍役規定の見直しが行なわれると共に、さらに藩財政にも、大きな制約を与えた。

以上のように、本報告では、津輕藩の蝦夷地出兵をとりあげ、藩が、かかる課役をどのようにうけとめ、また対応していったのかという問題について検討を加えることにする。

八戸藩の新田開発

―水利問題からの分析―

青森県立百石高校 三浦 忠 司

八戸藩の生産構造の特色として、新田開発が少なかったことが指摘される。明和二年の書上げによると、実高三万六千七〇六石余、内御蔵高二万六千二二三石余、給所高一万一七六石余、御新田高三六〇石余となっており、八戸藩が盛岡藩より分知誕生した寛文四年より明和二年までの一〇〇年間に、わずか三六〇石余の新田高があったにすぎなかった。

このような新田開発の停滞は、稲作の気候的条件や畑作の換金作物である大豆の栽培重視等の要因の他に、水利問題がかなりのウェイトを占めていたとみられる。八戸藩は幕藩体制安定時に成立した藩であったから、水田耕地の拡張はすでに限界に達しており、既存の用水源や水利施設からみて、これ以上の新規開田は難しかったからとみられる。

八戸藩の新田開発が最も盛行したのは文政二年から始まる藩政改革時である。八戸藩勘定所日記によると、天保元年より四年にかけて八戸藩最大の水田適地である馬淵川下流左岸の長苗代地方が新田開発の対象となり、用水堰の拡張・拡張、用水堤(溜池)の新・修築等の各種水利工事が施工されている。このことは、何よりも八戸藩の新田開発には新たな用水源の獲得と水利施設の構築が必要であったことを物語るものである。

この時期の新田開発は財政補填の一環として実施されたものであるが、その背景には藩の家格の格上げがあったといわれるから、その開発は耕作条件を無視して強引にして、かつ急激に行なわれた。その結果、新たな水利に伴う問題が発生し、新田開発は破綻をみることとなった。

八戸藩勘定所日記によると、本田の用水供給量の減少、浅水川(馬淵川支流)上流の盛岡藩領との水論の発生等の水利問題の他、草地の減少による肥料源たる刈敷地と牛馬の放牧地の不足、出河原・山野の開発による治水面での危険性の増大等の問題が記されている。

このため、天保五年の郷村帳では、元禄一〇年の郷村帳に比して、灌漑村落では、五一七石余(櫛引村を含めると、約四〇〇石弱)の水田高の増石があったにすぎず、八戸藩領全体では、七七九石の減石という惨めな結果に終わった。

新田開発による稲作の強制は、その後天保三年より始まる七ヶ年の凶作により大打撃を受けることとなった。天保三年の領内損毛書上げによると、高二万石の内、五七%が減石し、しかも水田高は六六%の減石と

なっていることは象徴的である。

三島通庸の山形県令時代の医療政策

日本大学山形高校 小形利彦

明治七年酒田県令として赴任し、同九年より山形県令となった三島通庸は「土木県令」「鬼県令」という評価があるが、三島の医療面での近代化に対する評価は余り聞かれない。県令在任中には、当時東北一といわれた山形県公立病院済生館の開院と同館に医学寮を設置し、外国人教師としてアルブレヒト・フォン・ローレッツを招請するなど医療面での政策も土木事業と同じように積極的な政策が展開された。しかし当時の山形の民情は医療に対する知識が未熟で、県民は十分に三島の意図とする事を理解できず、県議会ではしばしば問題とした。県議会では県費の無駄使いと考えて三島と対立し、ローレッツもまた議会の意向ばかり気にしている筒井館長と対立した。今回の発表では、明治九年から十五年までの県令在任における三島の医療政策について考えてみたい。